



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	まえがき : 本特集の背景
Author(s)	鄭, 惠先; Jung, Hyeseon
Citation	日本語・国際教育研究紀要, 22, 5-8
Issue Date	2019-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73442
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJLIES22_01_jung.pdf



まえがき：本特集の背景

鄭 惠 先

個別論文に入る前に、特集論文2.から4.で紹介する授業実践のシラバス構築に用いられた「北海道大学日本語スタンダードズ」（以下、北大スタンダードズ、本スタンダードズ）について触れておきたい。北大スタンダードズについては、すでに小河原（2015,2016）、小河原・鄭（2016）、鄭（2016）、鄭・須藤・今泉・水谷（2016）などでも繰り返し紹介してきた。よって、詳細な考察はそれらの論考に譲るとして、ここでは、北大スタンダードズと多文化交流科目との関連性、そしてCan-Do記述の枠組みとなる「3つのモード」「3つのCan-Do項目」「レベルと記載の基準」について、本スタンダードズからの抜粋・引用をもとに概説する。

北大スタンダードズは、2015年度から北海道大学で開講されている日本語科目の中級レベル、2016年度から上級レベルの各クラスで取り入れられている。本スタンダードズは、本機関のウェブサイトから「北海道大学日本語スタンダードズ 2016年度版」のPDF版をダウンロードすることができる。よって、Can-Do項目の具体的な記述内容については、そちらを参照されたい。

まず、北大スタンダードズの概要は、以下のようにまとめられている。

北海道大学では、留学生と日本人学生がともに学び、様々な社会的な問題の解決に向けた新たな手段、文化を継続かつ具体的に生み出しているような、新たな社会構築のための即戦力となる人材養成を目指している。そのために、平成23年度より外国人留学生と日本人学生が協働して学ぶ交流授業「多文化交流科目」を創設し、北大で提供する日本語コースの中核に据えた。「多文化交流科目」で育成を目指すスキルは、①課題を認識する、②ともに考える、③解決に向け実行する、の大きく3つに分けることができる。それに伴い、従来の技能別に分けられていた日本語コース・カリキュラムを改編し、留学生と日本人学生が協働して行う活動を支える「ことば」「コミュニケーション」としての日本語教育を提供している。本スタンダードズは、そのために必要な日本語とは何かを「レベル別」および「モード別」に記述したものである。

多文化交流科目で育成を目指すスキルは、さらに表1のように詳述することができる。

表1 多文化交流科目で育成を目指すスキル

①課題を認識する	②ともに考える	③解決に向け実行する
・分析力 ・情報収集力 ・多様性への気づき ・異文化理解 ・課題発見	・ファシリテーション ・説得力 ・論理的思考力 ・ディスカッション ・コミュニケーション力	・チームワーク ・リーダーシップ ・交渉力 ・情報活用力

北大スタンダード開発の当初は、初級4レベル、中級3レベル、上級1レベルの計8レベルの日本語コースの最上級レベルに多文化交流科目が据えられ、上級は多文化交流科目とほぼ同じレベルで、多文化交流科目で必要とされる各スキルの弱い部分を、学習者がみずから選択してトレーニングできるようにトピックまたはスキル別に設定されていた。なお、現在は、学習者がレベルを問わず自由に履修できる多文化交流科目の方向性を考え、中級レベルの多文化交流科目が多数開講されており、今後は初級レベルの多文化交流科目も整備していく予定である。

北大スタンダードでは、多文化交流科目における協働活動を支えるコミュニケーション能力を記述する枠組みとして、「外国語学習のめやす」(<http://www.tjf.or.jp/meyasu/>)を参考に、双方向のコミュニケーションの「やりとり」、解釈的コミュニケーションの「理解」、提示的コミュニケーションの「表現」の3つのモードを設定した(表2)。

表2 3つのモード

やりとり	「話す・聞く」 「読む・書く」	日常会話をする、面接を受ける チャットをする、メール・LINE交換をするなど
理解	「聞く」 「読む」「見る」	講義を聞く、駅の構内放送を聞く 本・論文を読む、書類に目を通す、 テレビ・インターネットサイトを見るなど
表現	「話す」 「書く」	プレゼンテーションをする、カラオケで歌う レポートを書く、ブログ・ポスター・動画を作るなど

小河原(2016:7) から引用

これらの3つのモード別に、本スタンダードには「言語行動目標」「スキル」「アウトカム」という3つのCan-Do項目が設定された(表3)。

表3 3つのCan-Do項目

言語行動目標	スキル	アウトカム
「多文化交流科目」の目的を達成するために、各レベルでできるようになることを目指すもの	言語行動目標を可能にするために、各レベルで身に付けることが必要となる具体的な言語行動	授業活動において言語行動目標を達成したことを示す、より具体的な言語行動

現在、中上級レベルの日本語科目においては、3つの各モードに中級3レベルは基礎と運用の2科目、上級1レベルはトピック別4科目の、(3モード×3レベル×2科目)+(3モード×1レベル×4科目)でカリキュラムが構成されている。なお、初級レベルにおいてはモード別にはせず、従来の科目名のまま本スタンダードの言語行動目標にもとづいてシラバス構築を行っている。

このように、開講している日本語科目をCan-Do形式のスタンダードとして記述した結果、表4のようにモードごとのレベルを分ける基準が明確になると同時に、能力記述の記載基準も明確になり、「モード」と「レベル」の関係が整理された。

表4 レベルの基準と記載基準

	レベルの分類基準	記載基準
やりとり	・ 日常的な話題から抽象的な話題へ ・ 大まかな説明から細かい説明へ ・ 命題重視から待遇重視へ ・ 短い表出・理解から長い表出・理解へ ・ 既習内容の活用から応用へ	(1) 内容の幅と深さ (2) 働きかけ (3) 反応
理解	・ 短いものから長いものへ ・ 事実説明から幅広く専門的なジャンルへ ・ 単独のストラテジーから複雑かつ複数のストラテジー使用へ ・ 大まかな理解から速く正確な理解へ ・ 既習内容の確実な理解から応用へ	(1) 対象となる内容 (2) ストラテジー (3) 解釈レベルの程度
表現	・ レポートを書くためのパーツから段落のある論理的な構造のある文章へ ・ 正確でより複雑な表現へ ・ データや引用を用いたより客観的で論理的なものへ ・ 短いものから長いプレゼンへ	(1) 使われる表現 (2) 組み立て能力 (3) プレゼン技法

北大スタンダードを取り入れて実際に日本語コースを展開してから2018年度で4年目を迎える。本特集は、上記の各モードとレベル別Can-Do記述の妥当性と整合性を検証するために企画された。北大スタンダードにもとづいて構築されたシラバスにどのような授業計画が記載され、各クラスでどのような教室活動が行われているか、それぞれの授業の手法、教材、評価を具体的に示して共有することで、今後の日本語スタンダードの改善とカリキュラムの評価に役立てることができると思う。

参考文献：

- 小河原義朗（2015）「多文化交流科目を中心とした日本語教育のカリキュラム改編」北海道大学国際本部留学生センター（2015）『留学生と日本人学生がともに学ぶ「多文化交流科目」を考える』国際本部留学生センターブックレット1 pp.83-96
- 小河原義朗（2016）「多文化交流活動に必要なコミュニケーション能力を育成するための日本語スタンダードの開発」北海道大学国際連携機構国際教育研究センター紀要第20号pp.5-16
- 小河原義朗・鄭恵先（2016）「多文化交流活動で必要となるコミュニケーション能力育成のための日本語スタンダードの構築」 2016年度日本語教育学会秋季大会予稿集 pp.237-238
- 国際文化フォーラム（2013）『外国語学習のめやす』
- 鄭恵先（2016）「円滑な双方向的コミュニケーションを目指したアウトカム重視型の「やりとり」科目のコースデザイン」『北海道大学国際教育研究センター紀要』第20号 pp.17-27
- 鄭恵先・須藤むつこ・今泉智子・水谷圭子（2016）「中級「やりとり」科目の実践報告—アウトカム重視型のコースデザイナー—」日本語教育方法研究会誌Vol.22 No.3 pp.12-13

ちよん へそん（高等教育推進機構国際教育研究部准教授）